

The Scorpion and the Bureaucrat

経済に毒針を刺す官僚というサソリ

日本の経済政策は
逆効果を招く大失態の連続だ

ピーター・タスカ

日本の経済政策のことを考えていたら、有名な寓話を思い出した。

サソリとカメの物語だ。大きな川を渡りたいと考えたサソリは、背中に乗せてくれとカメに頼んだ。カメは断った。サソリに刺されたら死んでしまうからだ。

「心配するな」とサソリ。「もし君を刺したら、僕も沈んでしまうんだから」

カメは安心し、サソリを背中に乗せた。しかし向こう岸に近づいたとき、サソリはやっぱりカメの首を刺した。

「こいつめ!」。カメはうめいた。「なぜこんなことを!」

サソリはあっさり答えた。「仕方がないよ。刺すのが僕の習性なんだから」

過去10年の日本を見ていると、政策立案者はサソリの役を演じるのが習性となっているようだ。そして国民は、カメの役を演じる運命らしい。1990年のバブル崩壊以後、景気回復の兆しはすべて、経済政策という「毒針」で刺し殺されてしまった。景気を回復させるはずの政策が、逆効果をもたらしている。

消費税と利上げで自滅した

最悪の「毒針」は、97年の消費税引き上げだ。財政赤字を減らすのが目的だったはずなのに、景気が悪化して税収が激減し、結局は財政赤字も拡大した。

2000年にも同様の事態が起きた。「経済正常化」のために日銀が行った利上げは、時期が早すぎた。株価は下落し、銀行の経営危機が再び深刻化した。

4年後の今、カメがまだ半分も川を渡っていないのに、サソリはまた毒針のしっぽを振り上げている。日本の当局は「一体となって」デフレを克服し、持続可能な経済回復を達成すると世界に誓った。しかしこの1年間、具体的な景気刺激策が取られることはなく、政界では大幅な増税のための根回しが進んでいる。

さきあげた二つの例では、日本政府は世界経済の好調さに目を奪われ、すっかり油断していた。だが政策が実施されるころには、アジアの金融危機やアメリカのハイテク不況が進んでおり、景気後退をさらに悪化させる結果になった。株取引でいえば、株価がピークに達したところで買う初心者のようなものだ。

堅調な輸出に支えられ、政府はまた油断しはじめている。昨年の世界経済は、中国の旺盛な需要とブッシュ政権の景気刺激策に助けられて好調だった。しかし、石油価格が一時は1バレル=50ドルを超えるほど高騰し、米中の需要が減速するなか、来年の見通しは明るいとはいえない。

日本政府は「構造改革」の成果で景気は回復基調だというが、小売業の売り上げは低迷したままだ。バブル崩壊からの「失われた10年」の間、日経平均株価は2万2000~1万4000円を推移していた。政府はこの3年間、株式市場の「活性化」に努めてきたが、現在の日経平均は1万円付近に停滞している。

今やサソりに刺されなくても、カメは頭を水から出すことさえできない。水をかく力もすっかり弱っている。

泳げないサソリは、川を渡るのがどんなにむずかしいか理解できない。同様に、経済的な価値を生み出さない官僚は、国内の需要が改善しなければ、増税をすることも財政赤字を解消することもできないのが理解できないようだ。

刺される国民にも責任あり

寓話のなかの2匹の動物を待ち受ける悲惨な運命は、誰の責任なのか。一見すると、サソリが悪役にみえる。しかし、サソリは自然の習性に従っているだけだ。一方、カメはサソリの依頼を断ることもできたし、水に潜ってサソリを振り落とすこともできたはずだ。

私に言わせれば、悪いのは両方だ。もしかしたら、2匹とも最初から向こう岸に渡る気がないのかもしれない。あるいは2匹は何か特別な関係で、抱き合っただけで満足するつもりなのかもしれない。

日本のエリートに国民を刺す習性があるとしたら、日本の国民には刺されて喜ぶ習性がある。両者の習性が変わらないかぎり、景気回復はむずかしい。

ピーター・タスカ

日本の証券投資を専門とする資産運用会社アーカス・インベストメントの共同創設者。著書に『不機嫌な時代』『カミの震撼する日』などがある。

ニューズウィーク日本版

2004年11月17日号 P.13